

二〇二〇年度 桐朋女子中学校入学試験 (A入試)

筆記試験 (国語)

受 験 番 号

氏 名

【注意】

- 一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。
- 二、問題冊子は1ページから18ページまであります。
- 三、「はじめなさい」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。
- 四、答えは、すべて解答用紙に書きなさい。
- 五、問題冊子に書きこみをしてかまいません。
- 六、「やめなさい」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙も問題冊子も表を上にして、机の上におきなさい。
- 七、試験時間は四五分です。

一、次の①～⑮の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。また、⑯～⑳の——線部の読みをひらがなで答えなさい。

- | | |
|--------------------|---------------------------------------|
| ① 現状をダカイする。 | ② 教会でボクシの話を聞く。 |
| ③ 彼の意見はマトを射たものだった。 | ④ シンコキユウをして落ち着こう。 |
| ⑤ ノウリツを上げる取り組み。 | ⑥ 情報のシュシャ選択 <small>せんたく</small> が重要だ。 |
| ⑦ 雨天の場合はジュンエンとなる。 | ⑧ シュウシュウがつかない状態になる。 |
| ⑨ チンギンの値上げを要求する。 | ⑩ 水たまりに顔がウツる。 |
| ⑪ ギョコウを見学する。 | ⑫ 新記録をジュリツした。 |
| ⑬ カンショウにひたる。 | ⑭ キセイする人々のために列車が混む。 |
| ⑮ キョウコな意志。 | ⑯ 便乗値上げに反対する。 |
| ⑰ 骨身をけずる。 | ⑱ 湖水地方の美しい景色をながめる。 |
| ⑲ あらい木目。 | ⑳ 春らしい装いをする。 |

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問いに答える場合、「、」「や」「。」等も一字と数えます。

五月の終わり、千春ちはるがお店へ入るなり、おじさんのほうから聞かれた。
「今日はたまねぎか？」

よっぽどゆううつそうな顔をしていたらしい。
発端はつたんは、週末に開かれた、サナエちゃんのお誕生日会だった。千春と紗希さきもふくめ、クラスの

女子の半分以上が招待されていた。

サナエちゃんから日程を知らされるなり、紗希は悔しそうに断った。

「ごめん。あたし、行けない。塾の全国テストなんだ」

「そっか。じゃあ、しょうがないね」

サナエちゃんも残念そうに答えた。怒っているふうには見えなかった。

でも、^①本音はそうじゃなかったらしい。お誕生日会の当日、集まったみんなの前で、サナエちゃんはおおげさにため息をついてみせたのだ。

「ガリ勉ってやだよ。友だちより勉強のほうが大事って、どうなの？」

サナエちゃんの広々としたリビングが、しんと静まり返った。

お誕生日会の主役だから、反論しづらいというだけではない。クラス委員をつとめ、先生からも頼りにされているサナエちゃんは、しっかり者で気が強い。堂々と反対意見をぶつけられるのは、同じくらい気の強い、当の紗希くらいなのだった。

それでも勇気を振りしぼって、千春は言い返した。

「だけど、紗希も来たがってたよ」

本当のことだった。パーティーには参加できないかわりに、サナエちゃんのためにプレゼントを買って、休み明けに学校で渡すつもりだと聞いていた。

サナエちゃんがあわれぶような目で千春を見た。

「前から思ってたけど、千春ちゃんも大変だよ。あの子、最近塾ばかりで、学校なんかどうでもいいって思ってるっぽくない？」

今度は、なにも言い返せなかった。それは千春も「A」感じていることだったから。

紗希が塾通いで忙しくなっているから、いっしょに帰ったり、遊んだりする機会は「B」減っ

ている。最近はたまに、宿題を写させてほしいと頼まれるようになった。写させてあげること自体は、別にかまわない。これまで千春も、何度となく紗希に勉強を教えてもらってきた。ただ、こんな宿題なんか意味あるのかな、とこぼされても、なんとも答えられない。

紗希に悪気がないのは、千春にもわかっていて、悪気なく、学校の授業はたいくつだとけなし、塾の先生や友だちの話ばかりする。悪気がないとわかっていても、千春はなんだかすっきりしない。

お誕生日会の翌日、紗希になにをどう伝えるべきかと千春は悩んだが、その必要はなかった。サナエちゃんの文句は、すでに本人の耳にも入ってしまったのだ。お誕生日会に出席した誰かが、「C」告げ口したようだった。

「こそこそ悪口言うなんて最低」

紗希は息巻いていた。

「あたし、別にガリ勉じゃないし。将来のために必要なことをしてるだけだよ。いい学校を出て、いい会社に入って、いい人生を送りたいんだもん」

以来、紗希とサナエちゃんはひとも口をきいていない。

紗希の味方につく女子もいて、教室の中には冷たい風が吹き荒れている。どういうわけか、担任の先生と男子たちは、「D」気づいているそぶりがないけれども。

千春の話を聞き終えたおじさんは、低くうなった。

「ややこしいことになっちまってるなあ」

そのとおりだ。ものすごく、ややこしいことになっている。

「いわゆる価値観の相違^②ってやつだ。小五でもあるんだなあ。そりゃ、あるか」

「カチカンノソーイ？」

またしても、千春にとってはじめて聞く言葉だった。

「生きていくうえで大事にしたいものが、ちがうってこと」

おじさんが補った。それなら、千春にもなんとなくわかる。

「有名な学校や大きな会社に入るのが、すごく重要だって考えるひともいる。そうじゃないひともいる」

正直なところ、紗希の主張を、千春も完全に理解できていくわけではない。もちろん、「悪い学校」よりも「いい学校」で学び、「悪い会社」よりも「いい会社」で働くに越したことはないだろう。でも、「いい人生」と言われても、それが具体的にどんなものなのか、どうもぴんとこない。

「価値観の相違っていうのは、おとなの世界でもよくあるんだ。それが原因でいろんな争いが起きてる。今も昔も、世界中でね」

おじさんは、うんざりした顔でため息をついている。

「友だちどうしのけんかだけじゃない。夫婦が離婚したり、国どうしが戦争をおっぱじめたり」

「せ、戦争？」

「うん。極端な例だけだな」

千春にも、ため息が伝染した。そんなにむずかしい話だったのか。

「じゃあ、どうすれば仲直りできるの？」

「きみはどう思う？」

聞き返されて、頭を整理してみる。紗希とサナエちゃんの価値観とやらが食いちがってしまっているのが、問題らしい。ということとは、
「どっちかに考えを合わせればいいの？」

「それは無理だろうな」

おじさんが首を振った。

「え？ でもさっき、価値観がちがうのが問題だって……」

③「原因だって言ったんだ。問題じゃない。問題は、そのちがいを受け入れられない人間がいるってこと」

きっぱりと言う。

「別に、同じにしくたっていい。いや、すべきじゃない。みんな同じじゃ、つまらんからな。ほら、カレーだってそうだろ？」

「へ？ カレー？」

④「いろんな種類のスパイスを入れるから、味に深みが出ておいしくなる。カレー、作ったことないか？」

「あるけど」

去年、調理実習で作った。いろんな種類のスパイスなんか使わなかった。板チョコみたいな私たちのルウを砕いて、鍋に放りこんだだけだ。おじさんのたとえ話は、たまにわかりにくい。

だけど今は、カレーの作りかたはどうでもいい。とにかく一番知りたいことを、千春はたずねた。

「だったら、仲直りはできないの？」

「いいや、そうとは限らない。たとえばさっきの話だけど、きみはいい学校やいい会社に入りた
い？」

急に話が飛んで戸惑いつつ、千春は正直に答えた。

「よくわからない」

「ほら。きみの価値観と、その友だちの価値観も、ぴったり同じってわけじゃない」
「あ」

「だからって、その子も受験なんかやめちまえとは思わないよな？」

千春はこくりとうなずいて、でも、とつけ足した。

「ちょっとさびしい」

「そうか、そうだよな」

おじさんがつぶやいた。

「じゃあ、その子の受験がうまくいかなきゃいいと思う？」

「まさか」

そんなことは、思わない。クラスが上がったと報告してきた紗希のうれしそうな顔が、千春の頭に浮^うかんだ。

「そういうことなんだよ。価値観がちがったって、友だちでいられる」

おじさんが千春の顔をのぞきこんだ。

「認めればいい。自分とはちがう考えかたも存在するってことを。そのふたりも、おたがいを認められれば、仲直りできる」

「うん」

でも、どうやって？

「きみが手助けしてあげれば？」

千春の疑問を読みとったかのように、おじさんがにっこり笑った。

翌日、千春はさっそく紗希に持ちかけてみた。

「サナエちゃんと仲直りしたら？」

「なにそれ、あたしからあやまるってこと？」

紗希はあからさまに顔をこわばらせた。もともと大きな目をさらに見開いて、千春をきっとにらみつける。

すんなり賛成してはくれないだろうと、千春も覚悟^{かくご}はしていた。紗希はがんこなのだ。一度こうと決めたら、かんたんにはゆずらない。

「あやまるっていうか、とりあえず話をしてみるとか……」

「絶対いや」

紗希がぶるんと激しく首を振った。

「だって、あたしは悪くないもん」

「わたしもそう思うよ」

紗希は悪くない。そしてサナエちゃんも。ただ、ちがうだけなのだ。

おじさんに言わせれば、「価値観の相違」をめぐるもめごととは、たいていそうらしい。片方がよくてもう片方が悪い、あるいは片方が正しくてもう片方がまちがっている、ということとは、ほんどない。

大丈夫、本人たちも仲直りしたいと思ってるはずだから、とおじさんは自信たっぷりに請^うけあってもいた。ふたりとも意地張^{だてぢぢ}って、きっかけをつかみそこねてるだけだ。誰かが背中を押^おしてあげれば、きつとまるくおさまる。

II

「でも、早く仲直りしたほうがいいよ」

千春は思いきって続けた。紗希が不服そうに口をとがらせ、けわしい声でまくしたてる。

「なんでそんなふうに言うの？ 千春もサナエちゃんの味方なわけ？ がんばって勉強するの

が、どうしていけないの？」

千春は紗希から目をそらさずに、ただ聞いていた。いつもおじさんが千春の話を聞いてくれるときに、そうするように。

「がんばらなきゃ、ついてけないんだもん」

ほんの少しずつ、紗希の声が小さくなった。

「あたしだって、千春やみんなと遊びたいんだよ……でも、どうしても時間が足りなくて……クラスもまた落ちちゃったし……」

口をつぐみ、目をふせる。

「わたしも紗希と遊べなくて、さびしいよ」

千春は注意深く口をはさんだ。

「サナエちゃんも、みんなもそうだと思う」

⑤ 紗希がはじかれたように顔を上げた。怒ったかな、と千春は反射的に身がまえた。

あらためて紗希とむきあって、はっとする。紗希の目はうっすらと潤^{うる}んでいた。ほっぺたと鼻の頭は、真っ赤に染まっている。

おじさんの問いかけを、千春は唐突^{Ⅲどうとつ}に思い出した。その子の受験がうまくいかなきゃいいと思う？

う？

「さびしいよ。さびしいけど、紗希を応援^{おうえん}したいと思ってる」

伝われ、伝われ、と念じながら、つけ加えた。紗希がぱちぱちとまばたきをして、千春の顔をじっと見つめた。

紗希がサナエちゃんにプレゼントを渡したのは、その次の日のことだった。

「遅^{おそ}くなったけど、おめでとう」

よく通る声で言っ、リボンのかかった包みをサナエちゃんに差し出した。紗希はがんこだけれど、いったん納得したら行動は早いのだ。

「お誕生日会、行けなくてごめん」

朝の会がはじまる直前で、教室にいるほぼ全員がふたりに注目していた。

「……ほんとは、行きたかった」

ためらうような間を置いて、紗希は言いそえた。サナエちゃんは探るような目で紗希をしばらく眺めてから、ぶいと目をそらした。

「ありがとう」

そっぽをむいたまま、小声で答えた。紗希が本気で言っていると、ちゃんとわかったようだった。

放課後、千春はもちろんおじさんの店に寄った。引き戸を開けると、おじさんがにやりと笑った。

「はちみつ？」

「はちみつ！」

千春は叫び返して、お店の中へと駆けこんだ。

(瀧羽麻子『たまねぎとはちみつ』偕成社)

問い一、本文中の「A」Dに入る言葉として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア こっそり イ めっきり ウ すんなり エ うすうす オ まったく

問い二、——線部①「本音」とありますが、千春はサナエの本音をどのようなものだと考えていますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 週末も勉強しなくてはならない紗希をかわいそうに思う気持ち
 イ 学校や友だちよりも勉強を優先する紗希にいらだつ気持ち
 ウ お誕生日会に来てくれたクラスの人々に感謝する気持ち
 エ 紗希を仲間外れにしていることに申し訳なく思う気持ち

問い三、
 線部Ⅰ「こぼされても」・Ⅱ「まるくおさまる」・Ⅲ「唐突に」の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 「こぼされても」

ア ぶつぶつ文句を言われても
 イ ちくちくいやみを言われても
 ウ うじうじ泣き言を言われても

Ⅱ 「まるくおさまる」

ア 幸運がまいこぶ
 イ 良い考えがうかぶ
 ウ おだやかに解決する

Ⅲ 「唐突に」

ア すぐに
 イ やっと
 ウ ぶいに

問い四、
 線部②「価値観」とありますが、紗希の価値観とはどのようなのですか。それが最もよく分かる一文を本文中から探し、はじめの五字を答えなさい。

問い五、
 線部③「原因」だと言ったんだ。問題じゃない。」とありますが、おじさんは紗希とサナエの仲たがいについてどのように説明していますか。次の文章の a・b に当てはまる言葉をそれぞれ指定された字数で探し、ぬき出して答えなさい。

原因は紗希とサナエの（ a 十六字 ）がちがっていることであり、問題はそれを二人が

お互いに（ b 八字 ）ことである。

問六、――線部④「いろんな種類のスパイスを入れるから、味に深みが出ておいしくなる」とありますが、ここでおじさんが言いたかったことについて、次の問いに答えなさい。

(1) 「いろんな種類のスパイス」とは何を指しますか。十五字以内で答えなさい。

(2) 「おいしくなる」とは、何がどのようになることを指すか、答えなさい。

問七、――線部⑤「紗希がはじめたように顔を上げた」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「はじめたように顔を上げた」とは、どのような気持ちによるものですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 反発 イ おどろき ウ はじらい エ 失望

(2) 紗希が(1)のような気持ちになったのはなぜですか。六十字以内で答えなさい。

問八、――線部X「たまねぎ」、Y「はちみつ」とありますが、これらは「今日はたまねぎ、明日ははちみつ」という外国のことわざを元にした言葉です。「たまねぎ」と「はちみつ」はそれぞれどのような一日を指していると考えられますか。本文全体をふまえ、それぞれ五字以上十字以内で答えなさい。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問いに答える場合、「、」「や」「。」等も一字と数えます。（問題の都合上、本文を省略しているところがあります。）

一

人間と人間以外の動物の行動の違いは、何でしょうか。

「言語」や「道具」を使用することともいわれていますが、イルカのように「言葉」を使う動物もいれば、道具を使いこなす動物や鳥類も多数知られています。「人と人以外の動物を分かつも

の」を動物の基本行動である「食行動」で考えると、より違いが鮮明になります。

*文化人類学者の石毛直道氏は、「すべての人類に共通し、人類史の初期にまでさかのぼれる事項は何であるか考えたとき、『人間は料理をする動物である』、『人間は共食をする動物である』という二つのテーゼにたどりつく」と言っています。日本の霊長類学者によって、石を使って木の実を上手に割る野生のチンパンジーの例も報告されていますが、料理の中核的な技術である「火」を使用する動物は、ヒトに限られています。

また、「共食」も人間以外の動物にはあまりみられない行動です。②草原で草食動物が同時に食べているのは、共食ではありません。集団で敵を警戒しながら、同じ時間に食べているだけで、同じ食事をシェアしているわけではないからです。また、親鳥が雛鳥に餌を与えたり、野生のチンパンジーやボノボの群れでは、食べものを他の個体にねだられたら、分けてやるがあります。「A」、動物においては、成長したら自分で餌を探し、自分だけで食べるのが原則です。動物の食事行動は単体で完結し、基本、共食は行われません。

それに対して、ヒトの食事は狩猟採集民になったときから、家族での食料分配が、生存戦略として重要となりました。現在ほぼすべての民族で、共食の基本的な集団は、家族が単位とされています。家族は、生まれた子どもの養育、さらにその集団内での食べものの獲得と分配という二大原則に基づいて形成されてきたといえます。

二

人間の共食の歴史は、家族単位から始まり、より大きな共同体へと広がっていきました。

【B】共食は、人と超自然的な存在である霊や神と食べるという神聖な意味をもつようになりしました。

*民俗学者の柳田國男によると、「食べる」という言葉は、タバル、タブの受け身、【C】「たまわる」「いただく」を示します。タバルという動詞自体が、「神が下さる」という意味のため、

「食べる」とは、もともと「神様に食べさせていただく」という意味でした。私たちは1人で食事するときも「いただきます」と言いますが、キリスト教徒の食前の祈りと同様、食べものを下さる神にあいさつしていた名残なのでしょう。

食事が、神との交流の場であり、神からいただく「おくりもの」であったのが、だんだん神の影が薄くなると同時に、食べものをお供えしたり、その一部をいただいて神と食事を共にする「神人共食」の意識も薄れてきました。代わりに、人類の進化の過程で培ってきたともいえる「人間同士の食事」が、共食の意味として使われるようになってきました。

歴史を振り返れば、共食のスタイルは、決して生得的なものではなく、社会や環境によって変化し、私たちの考え方次第でその形式はいかようにもなりうると思われます。「D」、家族集団の場合でも、インドのナール・カーストの社会では、結婚した男性は自分の生家で食事をし、妻と子どもとは食事をしなかったり、アフリカのビンクドゥ社会では、男性と女性は別居で、父と息子、また母親と娘は別々に食べたりと、その形式はさまざまです。

誰かに食べものを分けてもらう必要がなくなり、神の存在への意識も薄らいでいる現代においては、家族や仲間との共食だけでなく、共食そのものへの意味も改めて問い直される時期に来ているのではないのでしょうか。

《 中略 》

三

昔からある共同体の最小単位のひとつは「家族」ですが、その単語を聞くと、仲良く食事をする食卓の風景を連想する人も多いのではないのでしょうか。家族そろって食卓を囲む姿は、テレビなどのメディアでたびたび描かれてきたように、家族の一体感をあらわす縮図として扱われてきました。しかし、日本の歴史上で「食卓での家族団らん」の概念が生まれたのは、思いのほか最近のことです。

* 家族関係学が専門の表真美氏は、日本の家族団らんの歴史的な変遷を調べています。その調査によれば、近代までの一般的な家庭の食事は、個人の膳（せき）を用いて家族全員がそろわずに行われ、家族がそろっても食事中の会話は禁止されていました。では、食卓での家族団らんは、どのようにして始まり、どのように普及していったのでしょうか。

かつて、団らんの移り変わりには、「欧米からの借りものとしての団らん」^④「啓蒙としての団らん」^⑤「国家の押しつけとしての団らん」があったことが知られています。

食卓での家族団らんの原型が誕生したのは、明治20年代でした。教育家・評論家の巖本善治が、食卓での団らんを勧める記事を書き、キリスト教主義の雑誌にも同様の記述が複数登場しました。その後、* 国家主義的な儒教教育と結びついた記事により、家族そろって食事をするべきだという意見が広がっていきました。

その後、家族団らんが、一般的な家庭の食事風景になったのは1970年代頃でした。NHKの国民生活時間調査によると、この頃、家族で食事をしている家庭は約9割に達しています。共食が常識だったこの時代の家庭科の教科書には、家族一緒に食事を促す記述はほとんど見られま

せん。^⑥ その時期が過ぎ、1983年に出版された足立己幸氏の『なぜひとりで食べるの』という本の中で「孤食」という言葉が使われました。1980年代前半には、孤食が社会問題となり、1980年代後半には家庭科教科書に孤食へ対する注意喚起が記されました。2000年代前後は、家族で一緒に食事すべきという考えが、強迫観念的なものとして捉えられる時期でした。

食卓での家族団らんが、家庭の常識として成立していたのは、高度経済成長期にあたる1955〜1975年の20年間ほどでした。家族団らんは、それ以降の日本社会の進化の過程で、変わらずに残ってきたとはいえません。しかし今もなお、多くの人の心の中に、* ロールモデ

ルのような家族団らんのイメージが生き続けているのはなぜなのでしょう。

四

家庭での食事は、基本的には家庭ごとに非公開で行われるものです。他の家庭の食事の全貌は、当事者たちが自ら公表しない限り、通常は明らかになる機会はありません。その「密室の行為」であった家庭の食が、ある本によって明るみに出て、世間に大きな衝撃が走ったことがあります。

2003年に出版された、岩村暢子氏の『変わる家族 変わる食卓』は、食マ^{*}ーケティングの目的で各家庭の1週間の食事、計2000以上の食卓の写真を収集、分析しました。その結果、親も子もそれぞれの食べたい時間に食べたいものを別々に食べることが増えたこと、また、子どもに嫌いな野菜を「食べてもらおう」ために、擦り込んだり混ぜ込んだりする親が減り、栄養バランスに関係なく子どもの好きなものだけを食べさせたり、欠食に気づかない親が増えたことがわかりました。また、過去と比べて、外食へ連れて行く父母世代も減り、話題の店や新商品をチェックする熱意も低下しています。その背景として、家族や社会の変容があるのではという指摘がなされています。

社会や環境の変化によって、日本の家族が、団らんを必要としない、あるいはできない生活形態になったのでしょうか。それにもかかわらず、家族団らんが理想の姿のように扱われるのは、高度経済成長期の「古き良き日本の思い出」が作り出したイメージにも感じられます。

(石川伸一『「食」の進化史』光文社)

*文化人類学——人間の生活様式などについて研究する学問。

*テーゼ——正しいか正しくないかを判断できる文章。

*共同体——血のつながりや地域のつながりなどで結ばれている集団。

* 民俗学——言い伝えを調べることで民衆の生活文化を明らかにしようとする学問。

* 生得的——生まれつき。

* 概念——ある事物の大まかな意味内容。

* 家族関係学——家族を対象とし、人間関係のあり方などについて研究する学問。

* 膳——一人前の食事をのせる台。

* 啓蒙——知識のない人間に必要な知識をあたえ、知的水準を高めること。

* 国家主義的な儒教教育——国家を第一と考える、儒教にもとづいた教育。

* 強迫観念——いくら打ち消しても心からはなれない、不快・不安な気持ち。

* ロールモデル——手本。理想的な姿。

* マーケティング——市場調査など、商品やサービスが売れる仕組みを作るための活動。

問い一、——線部①「人間は料理をする動物である」とありますが、「料理をする」ときに人間だけが行うのはどのようなことですか。本文中の言葉を用いて十字以内で答えなさい。

問い二、——線部②「草原で草食動物が同時に食べているのは、共食ではありません」とありますが、「共食」と言えるためには、どのようなことが必要ですか。本文中から四字の熟語をぬき出して答えなさい。

問い三、本文中の「 」A～Dに入る言葉として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア たとえバ イ だから ウ しかし エ すなわち オ そして

問い四、——線部③「いただきます」という言葉は、もともと何のために言う言葉だったと推測されていますか。本文中の言葉を用いて二十字以内で答えなさい。

問い五、——線部④「国家の押しつけ」とありますが、国家はどのような考えを押しつけようとしたと述べられていますか。本文中から十五字以内でぬき出して答えなさい。

問い六、——線部⑤「家族一緒にの食事を促す記述はほとんど見られません」とありますが、それはなぜですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア まだ家族一緒にの食事の良さが理解されていなかったから。

イすでに家族一緒にの食事の問題点が指摘されつつあったから。

ウ 家族一緒にの食事は当たり前になっていてうながす必要がなかったから。

エ 教科書の記述によってうながすという方法には効果が期待できなかったから。

問い七、——線部⑥「その時期」とはどのような時期ですか。解答らんに合うような言葉を、本文中から八字でぬき出して答えなさい。

問い八、筆者は、人間の「共食」は、時代と共に持つ意味・目的が移り変わったと述べています。

本文の **一**・**二**・**三** に説明されている「共食」の持つ意味・目的の移り変わりを、次のようにまとめました。「ⅠⅡⅢ」にあてはまる語句を、それぞれの本文中から、いずれも五字以内でぬき出して答えなさい。

一 の内容からは、狩猟採集民となったヒトが、「Ⅰ」として共食を必要としたことがわかる。

二 の内容からは、集団の単位が大きくなると、共食が神聖な意味を持つようになった、すなわち、「Ⅱ」の機会となったことがわかる。

三 の内容からは、明治以降になって、「Ⅲ」という意味を持つ共食が登場したことがわかる。

問い九、以下の(1)～(5)のそれぞれについて、本文の内容に合っていれば○を、合っていないければ

×を、解答らんに答えなさい。

(1) 神をうやまう気持ちだが、年長者への尊敬の気持ちにつながり、人間同士の共食を生み出した。

(2) 家族はもともと、子どもの養育と、食べ物の獲得と分配を目的とした、共同体の最小単位である。

(3) 現代の日本では、家族一緒に食事をするのがなくなっているが、これは人類史上初めてのことだ。

(4) 親が子の食事に関心を持たなくなっているという問題を解決するために、家族の共食の復活が必要だ。

(5) 社会の変化を無視して食卓での家族団らんを理想とし続けることは、正しいとは限らない。

問い十、本文では、「共食」や「孤食」といった食事のあり方について説明されていましたが、あなたはこれからの食事のあり方はどのようなになると予想しますか。理由もふくめて答えなさい。

